

せきしよばんしやしきあと

関所番士屋敷跡

久喜市栗橋北二丁目

関所番士屋敷は、寛永元年（一六二四）に栗橋関所番士の住いとして、江戸幕府が設けたものである。

関所番士の定員は四人で、これを二組に分け、毎日明け六つ（午前六時）から暮れ六つ（午後六時）まで、二人一組五日間交代で勤務していた。

維新时期最終の番士は、加藤、足立、島田、富田の四家であった。手当は二十俵二人扶持であったが、足立氏は故あって四人扶持に増量されていた。一人扶持は、一日五合の割合で、二人扶持は約十俵に当る。扶持は、幸手宿本陣中村家から送米されていた。

ここ足立家は、現存する貴重な関所番士宅で、寛永十二年（一六三五）足立十右衛門が五人目の役人として金町松戸御関所から転勤し、移り住んだのが始まりという。

加藤家、島田家も現存しているが、富田家は、明治二年の関所廃止とともに東京へ移転している。

各家敷地とも高く盛土し、いずれも約千四百平方メートルである。

なお、番士の墓は、常薫寺、深広寺にある。

昭和六十三年三月

久喜市教育委員会